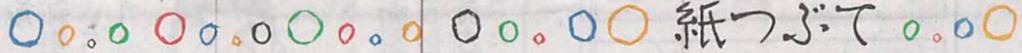


2020.12.12



紙つぶて

治療によって心を深く傷つけられ、治療者不信になってしまった人を診る機会が多い。もちろん自分自身の臨床においては信頼関係を築き、安心を感じてもらいながら治療を進めていくが、助けを求めてしまった治療によって、かえって傷つけられてしまうのはあまりにも残念なことである。

治療には「非特異的因子」と呼ばれるものがある。これは専門的な技法などとは関係なく、その治療者の温かさや共感的姿勢などを意味する。つまり「治療者の人柄」と言ってもよいものだ。実は専門的な技法よりも、非特異的因子の方が治療に大きな影響をもたらすという研究結果もある。

私自身が診療できる数にはあまりにも限りがある



治療と人柄

水島 広子

るため、「とにかく人柄のよい治療者を見つけて」と患者さんに答えるしかない場面は実際多い。「人柄」に、さらに条件をつけるとすると、「他者の意見に耳を傾ける寛容性があること」だと思う。すべての医師がすべての病気に完璧な治療ができるわけではない。しかし、薬物療法については、より経験と知識を積んだ人の指導を受ければずいぶんと患者の役に立つ。専門性の高い人たちが、オンラインでも受けられるセカンドオピニオン外来を始めてきている。医療過疎地においても、変なプライドにとらわれず、そのようなシステムを活用して幅広い患者さんを治療できる「人柄」が本当に求められている。(精神科医)